健康のススメ

板東 浩

「童話の素朴さ」（第五十五回）

花はしずかに　さく日待つ
　花のつぼみを　いたわれよ

まほろば・童話の里では、子供たちが主役となり楽しく遊んでいる。芝生の庭で鬼ごっこをしたり、図書室で絵本を広げたり、マルチスライドを観たり。ここは山形県にある浜田広介記念館。「日本のアンデルセン」と呼ばれた浜田氏の業績を記念し、子供の文化活動の拠点が建てられた。

ちょうど山形市に出張した際に、本記念館に立ち寄ってみたのだ。隣接する彼の生家は昔ながらの造り。囲炉裏や板間で、子供たちが実際に見て触れ座っている。野山の草木と触れあい、本と親しみ、ゆっくりと時間が過ぎていく。

ここで生まれた広介は、早稲田大学英文学科に学んだ児童文学の巨星である。「ひろすけ童話」として代表的なものには、「りゅうの目のなみだ」や「泣いた赤鬼」など。善意に満ちた豊かな詩情が特徴だ。今回再び読んでみると、子供のころの素朴で純情な気持ちが蘇ってきた。

なぜ、広介の童話は人の心を打つのだろうか。広介は小さな頃から優秀であったが様々な苦労も多かった。しかし、母親との深い絆や豊かな自然の恵みが、人に対する深い愛情を育てたのだろう。辛い体験を乗り越えると、人は強くなり優しくなるのかもしれない。

最近のブームは「冬のソナタ」。寒く厳しい環境だからこそ、人はお互いに支えあい温めあう。最後に、私が好きな広介の一句を。

ほしいもの　冬の炉ばたの　あたたかさ
もう一つ　人の心の温かさ

（医学博士・内科医師）